20260322　朝礼拝　マルコによる福音書10章35〜45節

「仕える者になる」

先週の日曜日、礼拝後の青年会、婦人会、壮年会の各総会も終わった後、私は金ケ崎にあるムゼウムに行ってきました。ムゼウムというのは、敦賀と関りのあるポーランド孤児やユダヤ難民をテーマにした資料館です。

で、そのムゼウムで先日、「日本にやってきたユダヤ人たちが、当時、どんな風に過ごしていたのか」ということをテーマにした講演会があったんですね。この講演会の講師の先生が、私の大学時代の先輩だったので、特別にお声掛けをいただき、お話を聴きに行ってきた、ということです。ただ、今回、単なる聴講ではなくて、この講演の様子を、インターネットを通してライブ配信、生放送するというお役をいただいていました。なんで、そんな流れになったかと言うと、話すと長いので要約しますが、ムゼウムのスタッフに、敦賀教会幼稚園の卒園生のお母さんがいて、幼稚園で私がページェントとか生活発表のライブ配信をしていたことを知っていたので、お声掛けくださった、ということです。私も、貴重な経験ができそうだ、と思い、これを承諾しました。

講演では、久しぶりにアカデミックなお話を聴けて、良い刺激をいただきました。たまには大学の講義を聴きに行きたいな、と思えるくらいに面白かったです。一方で、依頼されていたライブ配信に関しては、結果を言えば、ムゼウムにクレームが入るくらいの大失敗でした。非常にご迷惑をかけてしまった、と言うのが、今回の顛末です。どんな失敗かと言えば、まずライブ配信が上手く開始できず冒頭10分が欠けていること、そして、音声マイクが不調で講師の先生の声が聞き取りづらいまま配信されてしまったこと、です。言ってみれば、これはもう放送事故という奴ですね。ただ、欠けた10分は、もうどうしたって挽回できませんが、音声の聞き取りづらさに関しては、

パソコンで処理をして、音声の鮮明化を行いました。今、ムゼウムのホームページにアクセスすると、聞き取りやすくなった講演の録画を視聴することができますので、良ければどうぞ。

今回、全然私の専門じゃないお仕事をさせてもらって、やっぱり「餅は餅屋だな」と痛感しました。門外漢が出しゃばったら、自分には無用なプレッシャーと、周りには要らん迷惑をかけてしまうという。あと、事と次第によっては、方々に頭を下げて謝罪して回らないといけない。ただ、それでも私の正直な感想を述べても良いのなら、今回のお仕事、その計画準備やテスト配信などの事前段階も含めて思い巡らせると、とても楽しかったんですよね。牧師も、園長も、一人仕事が多いので、横並びの関係で一つの目的のために連携協力するという経験は、とても新鮮で面白かったです。あと、さんざん迷惑をかけておいて失礼な話ですが、今回の私の大失敗も、私にとっては良い経験でした。もう同じ失敗はしないように学べましたし、間違いなく私の配信技術は向上しました。次、幼稚園でライブ配信する時は、もっと良い映像をお届けすることができるでしょう。

なので、今回の一件で、私が思ったのは、確かに「餅は餅屋」という教えに間違いは無く、専門外のことに無暗に手を出すのは、自分にも周りにもリスクが伴う。でも、その自分の守備範囲から一歩はみ出す経験を通して、初めて得る知識や気付きも多いということです。

今日の聖書の話に入っていきますけれど、「仕える者になり、すべての人の僕になりなさい」というイエス様の教えと言うのは、一つの解釈として、「失敗を恐れずに、奉仕することを続けよ」ということなんじゃないかと思います。私の中で、「仕える者」の対極にある「偉い人たち」というのは、できるだけ失敗を避けて、自分の偉さを守ろうとする人たちことです。神様の御心に忠実になろうとしたり、隣人のために奉仕を続けたり、自分の賜物を積極的に用いようとすれば、するほど、ようは働きが多くなって、言葉や行動の回数が増えるわけなので、失敗する回数も、謝る回数も絶対に増えちゃうんですよね。偉い人になって、他者に命令したり、操作したりする方が失敗も

少ないし、謝る回数も減るでしょう。だって、現場で失敗するのは他者なのだし、その失敗を謝罪するのも他者なのだから。偉い人は、「こいつは、なんてダメな奴だ」と苦言を呈するだけで済むわけです。

今回の聖書のお話は、確かにキリスト者としての清らかな謙虚さ、麗しい奉仕精神を教えるものです。でも、その謙虚さと奉仕精神が実際に発揮されるところの現場に目を向けると、そこには「関わらなければ、起きなかった失敗」や「断っていれば、下げずに済んだ頭」があるわけです。もし本当に「皆に仕える者、すべての人の僕」に成り切るなら、その人は、日々失敗の連続でしょう。誰よりもよく働き、よく動き、よく話し、よく関り。その言葉と行いの全体数が多くなる分、自らの至らなさ、不甲斐なさ、申し訳なさの回数も比例して多くなり、その結果、心に負う傷や痛みも多くなってしまいます。

でも、多分、イエス様は、そういう信仰の示し方も望まれているのだと思います。イエス様ご自身は、この世界を救うという究極の隣人愛、究極の奉仕を成し遂げるために、自らの命を捧げられました。尋常じゃない痛みと苦しみを引き受けられ、十字架で死なれました。じゃあ、その主の十字架の出来事を知り、かつ主に倣う者となるように教えられている私たちは。もちろん、私たちが、ただ痛み苦しんだところで、世界は１ミリも変わりはしないでしょう。むしろ、私たちが痛み苦しみ、元気がなくなった分、世界はちょっとだけ暗くなります。しかし、私たちがちょっとだけ勇気を出し、未知のことに興味を持ち、自分に出来ることを少しだけ押し広げようと試みて、その失敗の痛みを引き受けられるなら。こんな私でも用いてもらえるのだと、失敗を恐れず、主の御名によって自分の可能性に期待できるなら。世界は、ちょっとだけ元気になるんじゃないかと思います。

「仕える者になる」とは、自分が自分に抱く劣等感や不安感を少し脇において、今、目の前に与えられた働きに「アーメン」と言って従事することだと思います。ヤコブやヨハネが、自分の座り

たい場所、居たい場所、つまり安住の場所を求めて、それをイエス様が了承されなかったのは、とても示唆に富んでいます。それは、単に偉いことを求めてはいけない、という倫理観の話ではなくて、時に、主に従うということは、自分の思い通りとはいかない立場や働きを受け入れないといけない、ということです。そして、仕えることで、僕となることで、日々奉仕に精を出すなら、もちろん失敗することもあるわけで、そのしんどさを引き受ける覚悟も必要です。そう考えると、このヤコブとヨハネは、現場で苦労せず失敗のない、指示だけ出す「偉い人」になりたかったのかも知れません。

ここまで読み込んでみて、私が思い出すのは、ローマの信徒への手紙 5 章 3 節から 5 節の御言葉です。「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません」。この御言葉は、自ら現場に出て仕えることで失敗し、僕であろうとして上手く行かない時、でも、その苦難によって得られる経験や知識こそが練達なのであり、そこから新たな希望が見えてくる、と受け止めることもできるでしょう。まぁ、だからと言って、今日から我を忘れた奉仕の業に没頭する必要は全然ありませんが、ちょっとだけ、神様に愛されている自分の可能性を信じて、新しい奉仕や新しい働きに手を出してみるのは全然ありだと思います。もしかしたら、その先に、私たちを欺くことのない希望があって、キリスト者ならではの生きる喜び、仕えることの楽しさを味わえる場所が広がっているのかも知れません。

この受難節。主の十字架による痛み苦しみが、その実、「私たちの救い」という意味ある痛みであり、苦しみであることを知って感謝したいと思います。と同時に、私たちにも希望ある未来に向けて実践できる奉仕や働きがあると弁えて、ちょっとだけ勇気を出し、今までしたことのない仕え方、僕としての振る舞いを学んでいくことを続けて行ければと思います。そして、疲れたなら、しっかり休んで、心挫けそうなら、柔軟に方向転換しながら、主の肢であり、キリストの身体の一員とし

て「ありがとう」って言ってもらえる喜びを感じて歩いて参りましょう。私たち、重たい足を引きずり歩く「仕える者」ではなく、心軽やかに明日を楽しみにして生きる「仕える者」となれますように。最後にお祈りを致します。

神様。今日もあなたに招かれて、この礼拝堂に集えたことを感謝いたします。あなたは、私たちに期待し、何らかの働きを託すために、御声を掛けてくださっているのだと信じます。何の功もなく、何の取柄も無い、と思い込み意気消沈することもある私たちの、その本当の価値と尊さを御存じなのは、あなたです。そんな、あなたによって呼び出され、これから新しい１週間を踏み出そうとしている、私たち一人一人に、どうか相応しい知恵と力をお与えください。そして、仕える者として自信をもって歩み、大切な隣人と喜び分かち合うことができますように導いてください。あなたの御心に適った私たち一人一人歩みの上に、どうか幸いと祝福が豊かに注がれますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します